

## 〔資料紹介〕

## 資料紹介 丹尾安典氏旧蔵小野梓書簡

大日方 純 夫

## 一

ここに紹介する資料は、本学文学学術院教授丹尾安典氏（二〇二〇年三月、退職予定）がかねて所蔵してきた小野梓書簡（以下、本書簡）である。丹尾氏によれば、かなり以前、神田の古書店から購入したものという。

本書簡は、上方に書簡、下方に封皮が表装された軸物となっている。「小野梓書簡幅」と墨書された桐箱に入れられ、さらにこれが「小野梓書簡」という貼紙のある紙箱に収納されている。丹尾氏によれば、この形状は古書店から購入した時のままであるという。

書簡本体は、縦一七・五センチメートル、横三五・五センチメートルであり、封皮は、表裏を開いた形で、縦一八・五センチメートル、横一五・三センチメートルである。

早稲田大学大学史編集所編『小野梓全集』は、一九八二年三月、全五巻・別冊の刊行をもって完結したが、その際、全五巻の編集終了後に発見された小野梓の著作等計一六点を、別冊中に「補遺」として収録した。そして、完結以後に発見された著作を、『小野梓全集』補遺』として、『早稲田大学史記要』（以下『記要』）誌上で紹介する方針をとることにした。

これにもとづき、『記要』第一六巻（一九八三年一〇月）には、「その二」として阿部恒久氏により五点が、第一八巻（一九八六年三月）には、「その三」として佐藤能丸氏により二点が、第一九巻（一九八七年三月）には、「その四」として阿部氏により一点が、第二三巻（一九九一年三月）には、「その五」として阿部氏により一点が、それぞれ紹介されている。

しかし、以後、小野の新発見著作等は、『記要』に紹介・掲載されていない。ただし、第四八巻（二〇一七年二月）に掲載された木下恵太氏の「後藤雅信関係資料―立憲改進黨およびその掌事小野梓に係る党務資料」には、後藤雅信宛の小野梓書簡二点と小野名の封筒一点、および小野ら立憲改進黨掌事三人連名の後藤宛入党通知一点が、翻刻・紹介されている。いずれも立憲改進黨の党務に係る資料であり、『小野梓全集』第五巻収録の「書翰」に相当する。したがって、補遺「その六」にあたると言つてよい。

以上から、この資料紹介は、『小野梓全集』補遺の「その七」に該当することになる。

## 二

本書簡は、つぎのような文面からなっている。

【書簡】

啓本日御苦勞可被下旨御報申上置候処又々極急速を要候時事ニ付某参議ヲ尋ね候始末ト相成り事宜ニよれハ晩迄不在候故明後日午後第五時頃まで御延期被下度奉希望候也

十月十三日

梓

阿南様

【封皮・表】

大藏省中

〔大至急〕  
（朱筆）

阿南検査官補殿 小野検査官

会計検査官派出所 急

【封皮・裏】

本院

記本日少苦勞  
 与より上より  
 極速に  
 計其年成  
 即ち上より  
 之れに  
 以後の手帳  
 次より  
 手帳  
 手帳

本院

大蔵省中  
 阿南極直宿  
 會計極直宿  
 急

「十月十三日」付の本書簡は、封皮の記載から、「本院」（会計検査院）にいる「小野検査官」が、「大蔵省」の「会計検査官派出所」にいる「阿南検査官補」に宛てたものであり、墨書で「急」と記したうえに、さらに朱筆で「大至急」と記していることから、極めて急を要する書簡であったことがわかる。

書簡本文の内容は、「本日」（十月十三日）、「御苦勞」をかけること（来訪のことか）になっていたが、「極急速を要」する「時事」について、「某参議」を訪ねることになり、ことによれば晩まで不在となるかもしれないので、明後日の午後第五時頃まで延期してほしい、というものである。

小野が会計検査院の検査官であったのは、一八八〇（明治二三）年四月から一八八一年一〇月までであるから、「十月十三日」のこの書簡は、一八八〇年か一八八一年のものということになる。ただし、「阿南検査官補」については、当該時期の（明治十四年一月）と「明治十四年十二月」の『太政官職員録』にその旨の記載がなく、不明である。

では、本書簡は一八八〇年のものか、一八八一年のものか。内容から判断して、「極急速を要」する「時事」について、「某参議」を尋ねることになった「十月十三日」とは、一八八一年一〇月一三日に相違ないと考えられる。小野の「留客斎日記」一八八一年一〇月一三日の条には、参朝して大隈参議免職のを知り、辞職の意を決して、帰途、大隈邸を訪問し、談話した旨が記されている。すなわち、この日、出勤した小野は、前日の政変で参議大隈重信が免職となったことを知り、自らも辞意をかためて、帰途、大隈を訪ねて相談したのである。本書簡の「某参議」とは大隈のことであり、この日会うことになっていた「阿南検査官補」に、退庁前、「大至急」本書簡を送って、「明後日」午後五時までの延期を依頼したものと考えられる。したがって、本書簡は、「明治十四年の政変」直後の緊迫した事態を伝える極めて重要な書簡と言える。

では、「阿南」とは誰か。小野の「留客斎日記」から「阿南」に関係する記事を抜粋すると、別表のようになる。

## 【別表】 小野梓「留客斎日記」における阿南尚関係記事

## 1881 (明治14) 年

- 6. 16 阿南来訪。
- 7. 3 宇川・阿南等来訪。対飲而去。
- 7. 24 阿南等来訪。皆辞<sub>レ</sub>之。
- 7. 30 阿南来訪。
- 8. 12 阿南来訪。
- 9. 3 阿南来訪。
- 9. 18 宮地・阿南来訪。皆辞<sub>二</sub>接待<sub>一</sub>。
- 10. 2 奥田・阿南・松平来訪。
- 《10. 13 此日罷<sub>二</sub>大隈参議之職<sub>一</sub>。(中略) 帰途訪<sub>二</sub>大隈之邸<sub>一</sub>、談<sub>レ</sub>事以<sub>二</sub>決意<sub>一</sub>示<sub>レ</sub>之。》
- 10. 14 入<sub>二</sub>大蔵省<sub>一</sub>、後参朝。退食之後、接<sub>二</sub>阿南・小為・家桃斎等<sub>一</sub>。共話<sub>二</sub>時事<sub>一</sub>、傍及<sub>二</sub>余進止之事<sub>一</sub>。
- 10. 16 阿南来訪。
- 10. 17 阿南亦来訪。
- 10. 21 阿南来訪。
- 12. 29 接<sub>二</sub>阿南・川本之書<sub>一</sub>。

## 1882 (明治15) 年

- 1. 10 接<sub>二</sub>阿南書<sub>一</sub>。
- 1. 12 阿南来訪。
- 2. 1 阿南来訪。
- 2. 14 接<sub>二</sub>安藤・川本・阿南之書<sub>一</sub>。
- 2. 16 安源・阿尚来話。
- 2. 24 安源・阿尚来話。
- 2. 26 阿南来話。
- 2. 27 接<sub>二</sub>阿南之書<sub>一</sub>。
- 2. 28 阿南来訪。
- 3. 2 接<sub>二</sub>岡健・桑深・阿尚等之書<sub>一</sub>。
- 3. 3 安源・阿尚来訪。
- 3. 5 訪<sub>二</sub>阿南尚及松濤<sub>一</sub>話<sub>レ</sub>事。
- 3. 7 接<sub>二</sub>阿尚之書<sub>一</sub>。
- 3. 27 接<sub>二</sub>阿南・安藤等之書<sub>一</sub>。
- 5. 9 接<sub>二</sub>阿南書<sub>一</sub>。
- 5. 10 阿南来訪。話<sub>二</sub>九州之情況<sub>一</sub>。
- 6. 12 阿南来訪、伝<sub>二</sub>総理之答詞<sub>一</sub>。
- 6. 14 晩間阿南来訪、致<sub>二</sub>雄橋老之書<sub>一</sub>。
- 6. 19 晩間阿南来、報<sub>二</sub>党事之形況<sub>一</sub>。
- 6. 22 晩間阿南来訪。致<sub>二</sub>雄橋老之意<sub>一</sub>曰、(略)。
- 8. 12 阿南来訪、致<sub>二</sub>河野・牟田口・矢野之意<sub>一</sub>、併接<sub>二</sub>付牟田口等之書<sub>一</sub>。
- 8. 20 投<sub>二</sub>書阿南<sub>一</sub>。晩間阿南・許斐来訪。
- 8. 25 秀島・阿南・山一来訪。
- 8. 26 阿南来訪。
- 9. 9 阿南来話。托<sub>二</sub>東京専門学校規則<sub>一</sub>致<sub>二</sub>之於総理<sub>一</sub>、併告<sub>二</sub>党事<sub>一</sub>。
- 9. 24 接<sub>二</sub>前島・阿南等之書<sub>一</sub>。
- 10. 5 使<sub>二</sub>阿南發<sub>二</sub>招状<sub>一</sub>。
- 11. 26 阿南来訪。

## 1883 (明治16) 年

- 2. 8 投<sub>二</sub>書阿南<sub>一</sub>、報<sub>二</sub>党務之措置<sub>一</sub>。
- 3. 18 阿南還至。

すなわち、一八八一年六月一六日以降、「阿南来訪」の記事が目立つようになり、しばしば「阿南」が小野を訪ねている。本書簡の翌日にあたる一〇月一四日には、小野は「阿南」・小川為次郎（親しい友人・小野義真（義兄）と、「時事」と自らの進退について話し、一六日・一七日・二二日には、「阿南」が来訪している。小野と「阿南」が親密な関係にあったことがわかる。

一八八二年にも、「阿南」に関する記事があり、「阿尚」という記載もこれに含めた。一八八二年六月二六日、京橋警察署に立憲改進黨が届け出た黨員名簿に、「大分県平民 書記 阿南尚」と記されているからである。<sup>(1)</sup>すなわち、「阿南検査官補」は、翌年四月に結党式を挙行した立憲改進黨の黨員となり、「書記」の役についたことになる。それを物語るかのように、結党後の五月一〇日には、阿南が来訪して「九州之情況」について小野と話している。六月二二日には、大隈からの伝言（依頼）を小野に伝え、八月一二日には、河野敏鎌・牟田口元学・矢野文雄（いずれも立憲改進黨幹部）らの意を小野に伝えている。そして、九月九日には、来訪した阿南に、小野は大隈総理に渡してほしいとして、「東京専門学校規則」を託している。阿南尚は、小野のもとで立憲改進黨の実務や連絡を担当していたものと推定される。

一八八三年二月八日にも、阿南に手紙を送って、「党務之措置」を連絡した旨の記載がある。ただし、三月一八日の「阿南還至」以後、小野の日記に阿南に関する記載はない。

以上から本書簡は、一八八一年一〇月の「明治十四年の政変」当時、小野が会計検査院の「検査官補」であった阿南尚に宛てた書簡であると推定される。

## 三

では、立憲改進黨員名簿に「大分県平民 書記」と記されている「阿南尚」とは、いかなる人物なのか。一九一四年発行の『大分県人士録』によれば、「前石川県書記官 阿南尚」の経歴は、大略、つぎのようである。<sup>(2)</sup>

弘化二（一八四五）年生まれ。明治九（一八七六）年、仕官して小倉県十五等出仕となり、のち警部に昇進し、福岡県に転任。西南戦争では巡查隊を率いて田原坂の激戦に参加。明治十一年、大阪府警部に転じ、さらに石川県、警視庁等を経て、二〇年、東京地方裁判所検事となり、二六年、大分地方裁判所検事に転任。その後、徳島県警部長となり、三二年、同県書記官に栄転して、在任八年の後、香川・石川両県書記官に転じ、三九年に退職。

会計検査院に勤務したことも、立憲改進黨に属したことも、記載されていない。しかし、一九〇三年三月五日付『東京朝日新聞』は、「休職香川県書記官」の「被告」阿南尚の経歴を、つぎのように記している。「被告」とあるのは、教科書疑獄<sup>(3)</sup>で阿南も検挙され、裁判に付されたからである。

被告の出生は大分にして、固<sup>(4)</sup>と同県改進黨の幹事たる折、時の政府に欸通して官途に出で、其後徳島県警部長より書記官となり、次で香川県に転任せるの経歴あり

大分県の改進黨幹事であつたが、政府に接近して官途についたというのである。なお、一八九二年、東京地方裁判所検事から大分地方裁判所の検事に転任した際には、「弄花事件の余波」であると報じられている。<sup>(4)</sup> いずれにしても、不審な点が多々ある人物である。



ちなみに、一九四五年八月、徹底抗戦を主張して自殺した鈴木貫太郎内閣の陸軍大臣、阿南惟幾は阿南尚の次男である。

※本書簡は当資料センターに寄贈されました。丹尾安典氏にあつくお礼申し上げます。

# 註

- (1) 「明治政史」(明治文化研究会編『明治文化全集 正史編 上巻』(改版) 日本評論新社、一九五六年、四三二ページ。
- (2) 『大分県人士録』大分県人士録発行所、一九一四年、三〇～三二ページ。
- (3) 一九〇二年一月から翌年三月にかけて、教科書採択をめぐる贈収賄で県知事・県書記官・師範学校長・県会議長・教科書会社社長ら二〇〇人近くが全国で検挙された事件。
- (4) 『東京朝日新聞』一〇月二二日。「弄花事件」とは、一八九二年に発生した裁判官たちの花札賭博事件のことである。